

## 20世紀初頭のコリマ・ユカギール民話の文体について

Some Observations on the Linguistic Style of Kolyma Yukaghir Folktales  
at the Turn of the 20<sup>th</sup> Century

遠藤 史  
Fubito ENDO

### 1. はじめに

この論文の目的は、筆者がかつて行ったコリマ・ユカギール民話の文体論的考察の問題意識を引き継ぎ、その対象を拡げて考察を進展させることである<sup>1)</sup>。筆者は以前の考察（遠藤 2006；以下「前著」と略す）において、コリマ・ユカギール人が母語（コリマ・ユカギール語）で語った民話テキスト資料を用いつつ、その語り（narration）に焦点を当てた分析を行った。その際、この言語に特徴的な統語構造である節連鎖（clause chains; clause-chaining constructions）に特に注目した。その結果、同じ言語でありながら、個々の民話の語り手によって、節連鎖をめぐる語りの技法（特に節連鎖の頻度や種類）に多様性が見出された。さらにそれらが、話の中で民話の語り手が表現したいこと—特に情景描写・心理への関心、筋の円滑な進行など—と関連している可能性も示された。

もちろんこれは萌芽的な試みにすぎない。この分析の妥当性を確かめるためには、考察の対象をさらに拡げ、より多くのデータを調べてみる必要がある。そこで本論文では、前著での分析より約1世紀前に語られた民話テキストを資料とすることで、考察の対象を時間的に拡大することを試みたい。この試みによって、分析の射程も、今後解明すべき課題もより明らかになるだろう。

本論文で検討する民話テキストは、帝政ロシアに生まれ、後にアメリカ合衆国に渡って活躍した民族学者ヨヘリソン（英語名 Waldemar Jochelson, 1855-1937）の著したユカギール民族誌（Jochelson 1926）の第11章（pp.241-269）から選んだ。この章には8篇の民話テキストが含まれ、各テキストには原文（当時のコリマ・ユカギール語）と英語訳が収録されている。原文の各単語の下に相当する英語表現も付けられており、かなり周到的な準備を重ねて出版された印象を受ける。原文のユカギール語の表記も一貫した原則のもとになされていて、言語学的な観点からも信頼に足るテキストである<sup>2)</sup>。

1) 本研究はJSPS 科研費 JP16K02675 の助成を受けたものです。また、コリマ・ユカギール語のデータを調べるにあたり、筆者の数回の現地調査の際、筆者を暖かく迎え入れてくださったネレムノエ村の皆様方に感謝申し上げます。

2) ヨヘリソンの採用した表記は、当時のコリマ・ユカギール語の文法概要である Jochelson (1905) で提示された音韻分析に基づいている。

ヨヘリソンがこれらのテキストを得たのは、1回目は1895年から1896年にかけて、2回目は1901年から1902年にかけてのフィールドワークであることが、この民族誌の序文（pp.1-2）から知られる。つまりヨヘリソンが記録に残したのは、厳密には19世紀末から20世紀初頭にかけてのコリマ・ユカギール語である。この民族誌に収められている民話のほとんどに1901年あるいは1902年の日付があることから、本論文ではこれをやや簡明に「20世紀初頭」と表現したことを断っておきたい。いずれにせよ、現在より約120年も前のコリマ・ユカギール語がかなりの正確さで記録に残されているのは貴重であり、はからずも言語学におけるドキュメンテーションの重要性を示してくれている。

本論文の分析において特に注目する文体的特徴は、以下の2点の統語構造である。まず第1点は、前著で中心的に取り上げた節連鎖である。現代のコリマ・ユカギール語における節連鎖の具体的な例は次の通り（角括弧は従属節の境界）<sup>3)</sup>：

- (1) [marqi-pə-gi tude jekečan kes'i:-dəllə] tabud-ə šolki-la-m.  
 娘 -PL-POSS 3POSS 鍋 持ってくる -CONV それ -INSTR 叩く -INC-T3SG  
 「娘は自分の鍋を持ってきて、それで叩き始めた」[NK38-53]<sup>4)</sup>

この例に見るように、コリマ・ユカギール語の複文は一般に節が鎖状に連なった構造をなしている。ほとんどの場合で複文中では従属節が主節に先行し、主節が複文全体をしめくくる<sup>5)</sup>。従属節の末尾には非定形動詞が位置し、この非定形動詞の持つ機能によって、後続する節に対する従属節の統語的關係が決まる。たとえば上記の例文(1)の場合、非定形動詞は副動詞なので、後続する節に対して副詞的な機能で接続する（-delle 副動詞の場合、時間的に先行する意味を伴い「～して、～してから」など）。

副詞的機能を持った従属節は、複文中にいくつか連ねることができる。次の例では、副詞的機能の従属節が3個連なっている：

- (2) [taŋ tittə tuis-ə moj-t] [kind'ə n'a:s'-in oŋo:-t] [jō-t]  
 その 3POSS 桶 -CONV 持つ -CONV 月 顔 -ALL 立つ -CONV 見る -CONV  
 ōnmə-gə 'i:-l'əl-u-m, [...]  
 知恵 -LOC 支える -EVID-△ -T3SG

「桶を手を持ったまま月に向かって立ち、(月を)見ながら考えた (...)」[NK46-14]

なおここでは、上記(1)とは異なる副動詞（-t 副動詞、時間的に重なる意味を伴い「～しながら

3) 以下のコリマ・ユカギール語の例は、1行目に形態素境界を伴った原文、2行目にグロス、最後に本文全体の訳を示す。形態素分析、グロス、本文全体の訳は筆者が作成したものである。また、グロスに用いられる省略記号一覧は本文の末尾に記載した。

4) 角括弧の中のNKはNikolaeva(1997)を示す。これは現代のコリマ・ユカギール語の民話テキスト集である。この資料からの引用はNHの後に続き、民話テキストの番号-そのテキスト中の文番号を付して引用箇所を示している。

5) 補足的な情報の追加や、いわゆる afterthought の場合などに、主節の後に従属節（非定形節）が付け足される場合も時折ある。

ら、～したまま」など)が使われている。副動詞の種類や、副動詞を伴う従属節の数などの選択は、基本的に話者に委ねられる。したがってここに、個々の話者・テキストによって異なる文体的特徴が現れる可能性が生じる。例文(1)の簡明で直線的な表現と、例文(2)の繊細な描写に満ちた表現を比べれば、ある程度この状況が察知できよう。この点のより詳しい分析については筆者の前著(遠藤 2006)を参照されたい。

注目する統語構造の第2点は、特定の形態論的標識により文中に焦点(focus)が標示された構造(以下「焦点構造」とする)である。焦点構造はユカギール語のユニークな類型的特点としてしばしば指摘される。焦点というのは情報構造上の概念であり、談話の流れの中で「本質的に新しい情報」を表わす部分をいう。たとえば「誰」「何」などの疑問詞の問いかけに対して、その答えを与える部分が典型的なものである。ユカギール語では名詞につく焦点標識(-*k*, -*ek*, -*lek*等)により、焦点の置かれた主語・目的語を形態論的に標示する手段が発達している。これに加えて動詞の側でも、文中のどの要素に焦点があるかを形態論的に標示することが可能である。このため、結果として出現する焦点構造では焦点が二重に標示される。すなわち焦点に関して一致の様相を呈する。現代のコリマ・ユカギール語の焦点構造の例をあげる：

(3) [irki'de modo-ŋi-də-gə] irki-n šoromə-lək kel-u-l.

あるとき 住む-PL-POSS-LOC 1-↑ 人-FOC 来る-△-SF

「あるとき(彼らが)暮らしていると、一人の男がやって来た。」[NK38-8]

焦点が置かれているのは、主節の主語である *irkin šoromələk* 「一人の男」で、焦点標識 *-lek* が現れている。一方動詞の側にも屈折接尾辞 *-l* (主語焦点)がある。これは当該主語に焦点が置かれていることを示す標識となる<sup>6)</sup>。

例文(3)に見るように、焦点構造は動名詞の所格形 (*-lge*, *-dege*, *-ŋidege* など)の直後に現れることが多い。動名詞の所格形を非定形動詞とする従属節は、一般にその直後に主語を変える(指示転換現象)。談話の流れにおいては、この環境は新しい指示対象を導入しやすい瞬間であると言える。なお、焦点構造はいわゆる主節現象(main-clause phenomena)である。既に述べたように、この言語では主節が複文全体をしめくくるので、焦点構造が現れた直後に複文全体が終わるのが一般的である。

例はそれほど多くないが、目的語に焦点が置かれるような焦点構造も存在する：

(4) ataqləstə pod'erqə-gə en almə-k edes'-ŋilə.

2番目の 日-LOC 別の シャーマン-FOC 呼ぶ-T3PL/OF

「次の日、彼らは別のシャーマンを呼んだ」[NK23-37]

焦点が置かれているのは目的語である *en almək* 「別のシャーマン」であり、焦点標識 *-k* が現

6) このような焦点構造を取り得るのは自動詞の主語だけである。コリマ・ユカギール語では他動詞の主語に焦点が置かれることはほとんどない(elicitationによっても上手く引き出せない)。また他動詞主語に焦点を置くような焦点構造も確立していない。つまりコリマ・ユカギール語の焦点標示は能格型である。

れている。一方動詞の側では屈折接尾辞により、目的語に焦点が置かれていること、また主語が3人称複数であり、動詞が他動詞であることが示されている。

文体論的観点から興味深いのは、語り手がどの範囲の主語・目的語を「焦点」として選択するかということである。民話には聞き手にとって新しい情報が多いはずだから、民話の冒頭部分に焦点構造が多く現れ、筋が進むにつれてその数は次第に減少するように思われるかもしれない。しかし以下で検討するように、実際にはそのような状況は起きていない。むしろ焦点構造の出現は、民話の語り手によって注意深くコントロールされているように見える。以下では、テキストの内容にも注意をはらいながら、焦点構造の出現状況の検討を進めていきたい。

本論文の構成は次の通りである：まず次の第2節では、ヨヘリソンの民族誌に収められている2篇の民話を筋の流れに沿って検討しつつ、節連鎖と焦点構造の現れかたを分析する。第3節ではその分析を踏まえつつ、節連鎖と焦点構造の出現の際に考慮される文体論的パラメータを指摘する。第4節では議論をまとめるとともに、前著の結果を振り返りながら、過去と現在のコリマ・ユカギール民話を文体論的に対照することを試みる。以上が本論文の組み立てである。

## 2. 文体論的考察：2篇のコリマ・ユカギール民話

### 2.1 月の顔の話

今回検討する1つ目の民話テキストはヨヘリソンの民族誌の第9章（Folklore, Kolyma Dialect）の最初に収められている（Jochelson 1926: 241-244）。コリマ・ユカギール語原文の長さは260単語である。ピリオドに基づいて数えた文の数は54、そのうち15文（文全体の27.8%）を節連鎖が占めている。原文末尾の注によれば、1901年10月に得られたテキストである（収録地はヤサーチナ川沿い。ヤサーチナ川はコリマ川上流域の支流の一つ）。

物語の概要は次の通りである—ある家族の父母が亡くなり、兄と妹が家の中に残された。兄は家の中に閉じこもり、寢床から起き上がろうとしないばかりか、妹をじっと見つめたままである。やがて食料が尽き、起き上がることを懇願する妹に向かって、兄は同衾することを持ちかける。妹はこれを罪だとして拒む。言い争ううち、外に物音が聞こえる。それは満月の顔をした老人の妖精（コリマ・ユカギール民話では死の表象）であった。事ここに至ってついに兄は寢床から起き上がり、月の顔の妖精と戦う。十日間の戦いの後、ようやくその妖精を殺す。ついに妹は兄と夫婦になることに同意し、特別な形の寢床で同衾する。次の朝、妹が外に出てみると、外には多くの野ウサギが歌い踊っている。そしてそこには美しい少年もいた。どこから来たのかと尋ねた妹に、少年は自分がかつては月の顔の妖精であったこと、今は人間に生まれ変わったことを告げる。さらに、地の霊がトナカイの代わりに、野ウサギを彼らの元に送り届けたのだ、と少年は説明する。

ヨヘリソンがコリマ・ユカギール語の原文を提供しているのはここまでだが、実はこの物語にはもう少し続きがあり、民族誌の第4章に概要がある（p.84）。それによると、兄と妹はか

くして血族内で結婚し、ここから生まれた娘は、この美しい少年と結婚した。月の顔の妖精に連なる一族がこうして生まれ、さらなる結婚を繰り返し、やがて野ウサギ氏族 (the Hare Clan) となった<sup>7)</sup>。それ以来、結婚しようとする男女は、かつて兄と妹が同衾したのと同じ形をした寢床に横たわり、しばしの沈黙の後、はじめて言葉を交わすのだ。—このように、基本的には氏族の起源を説明する形をとりつつも、数多くの神話的要素 (近親相姦的結婚、特別な形の寢床、月の顔=死の表象、野ウサギ/トナカイ等) が組み込まれ、密度の濃い話となっている。

民話の出だしでは、家族構成 (父、母、子供たち) が淡々と単文で紹介される。そして、不意に焦点構造 (下線部) が現れる。

- (5) t'at'a-gi čuote yondod'e-ge xodo-i. irkilaŋi tude emd'e yuo-mele.  
 兄-POSS いつも 毛布-LOC いる -I3SG じっと 3POSS 妹 見る-T3SG/OF  
 「兄はいつも毛布で寝ていた。じっと (自分の) 妹を見ていた」[YYT241]<sup>8)</sup>

ここでは目的語 *tude emd'e* 「自分の妹」に焦点が置かれているが、実はこの単語 *emd'e* は初出ではなく、直前の文で既に出現している (「妹と一緒に住んでいた」)。したがってこの焦点は、新しい情報を示すよりはむしろ、既出の情報に改めてスポットライトを当てていると考えられる。そうする価値は十分にある。なぜならこの妹こそが後の筋で重要な役割を果たすことになるからだ。一方これと逆の状況が、すぐ後の箇所に見出される。すなわちこの民話で初めて現れる次の節連鎖において：

- (6) tat modo-ŋi-de-ge legul-pe-gi eled'uo-i.  
 こう 住む -PL-POSS-LOC 食物 -PL-POSS 尽きる -I3SG  
 「(彼らが) このように暮らしていると、(彼らの) 食物が尽きた」[YYT241]

主語である *legul* 「食物」は初めて現れたもので、さらに異主語を導く従属節も直前にある。だが、ここに焦点は置かれぬ。その理由はおそらく、この「食物」は状況の描写に現れるだけで、続く筋で重要な役割を果たしていないからだ。なお、有生性がここに関与する要因でないことは、以下の考察で見る。

近親相姦的結婚を迫る兄と拒む妹との対話は、重苦しい雰囲気の中で交わされる言葉の応酬となる：

- (7) t'at'a-gi monn-i: "met laŋide kude-te-yek?" emd'e-gi monn-i: "pugu  
 兄-POSS 言う -I3SG 1SG 側 なる -FUT-I2SG 妹-POSS 言う -I3SG 太陽

7) 現在のネレムノエ村に暮らすコリマ・ユカギール人の多くはこの「野ウサギ氏族」に属するという伝承を、筆者はかつて現地でも聞いたことがある。ユカギール人はかつて北東シベリアに広く分布し、当時の氏族名の記録もいくつか残されている (Forsyth 1992)。しかし帝政ロシア進出後の環境変化、疫病や飢餓などにより勢力は急速に衰えた。

8) 角括弧内の YYT はヨヘリソンの民族誌 (Jochelson 1927) を示す。この民族誌からの引用は、YYT に続けて資料のページ番号を示している。たとえば [YYT241] は、この民族誌の 241 ページからの引用を意味する。

yovomu-te-i." t'at'a-gi monn-i: [...]

怒る -FUT-I3SG 兄 -POSS 言う -I3SG

「兄は言った『私の側においで』。妹は言った『きっと太陽が怒るでしょう』。兄は言った (...)」 [YYT241]

互いの主張は対立し、言葉はかみ合わない。3人称の所有接尾辞 *-gi* だけが二人の関係を示している。この場面で節連鎖が使われない理由はおそらく、互いの言葉の間に、対比も含め、関連性を見出すこと自体が難しいからだろう。この後しばらく妹一人の独白が続き、筋の流れは止まる。

物語が動き出すのはその直後である：

(8) tat n'ed'i-t modo-ni-de-ge, pude xolil-ek medu-l.

こうして 話す -CONV 住む -PL-POSS-LOC 外で 物音 -FOC 聞こえる -SF

「こうして（彼らが）話していると、外で物音が聞こえた」 [YYT242]

ここでは節連鎖と焦点構文の両方が使われている。節連鎖は沈滞した以前の状況からの発展を示し、焦点構文は新たに出現した「物音」にスポットライトを当てる。この無生物主語に焦点が置かれているのには意味がある。この「物音」は月の顔をした妖精（死の表象）の立てたものだからだ。妹はその姿を目撃する：

(9) pai ukoč. ukei-delle yuo-m čuolid'i pulud-ek kel-u-l

女 出る /I3SG 出る -CONV 見る -T3SG 神話 老人 -FOC 来る -△ -SG

n'ače-gi kinid'e titime-i, [...]

顔 -POSS 月 そのようだ -I3SG

「女（妹）は外に出た。外に出て（女は）見た。あの妖精（←神話の老人）が来たのだ。その顔は月のようだった。 (...)」 [YYT242]

女（妹を言い換えている）の行動、そして妖精の目撃が節連鎖によって関連付けられることで、筋の運びに一体感がもたらされている。こうして死を表象する妖精—焦点構文（下線部）で表現されている—を目撃するや否や、妹は家にとって返し、歌によって兄を起こそうとする。兄はついに起き上がる：

(10) koi eg-ie-i yovoti-d abud-gele moro-m, ta:čile

若い男 起きる -INC-I3SG 矢 -↑ 袋 -ACC まとう -T3SG そして

ukoč.

外に出る /I3SG

「若い男は起き上がった。矢筒を身につけた。そして外に出た」 [YYT242]

戦いに赴くこれらの行動はおそらく対等の重要性を持つため、単文の連続でストップモーションのように表現される。こうして十日間の戦いの後、彼は妖精を殺す。なおこの下りから、かつての兄と妹は、それぞれ *koi* 「若い男」と *pai* 「女」と表わされるようになっていく。二人は

大人となり、どうやら結婚の準備も整ったようだ。

結婚が成就した次の朝、二人が目を覚ますと、辺りの様子に変化している。外に出た二人は意外な光景を目撃するが、ここでも焦点構文（下線部）が使われている：

- (11) eg-ie-ni-de-ge           pude-t   londo-lox   yaxte-lek   med-u-l.  
 起きる -INC-POSS-LOC   外-ABL   踊り-FOC   歌-FOC   聞こえる-△-SF  
 「(彼らが) 起きると、外から踊りと歌が聞こえた」[YYT242]

歌と踊りの正体は野ウサギたちだった。そして柳で編まれた家の中に、美しい少年（焦点が置かれる）が、髪を梳かしながら座っている。少年は自らの正体をこう説明する：

- (12) nače-kinid'e   amde-lle,           coromo-ŋo-t           ed'ie-ye.  
 顔-月           死ぬ-CONV   人-である-CONV   生きる-INC-IISG  
 「月の顔（の妖精）が死んだので、(私は) 人となったのだ」[YYT243]

この箇所では節連鎖によって、妖精の死、人間に転生したこと、そして生き始めたことの、超自然的な3つの事態が関連づけられている。

この民話の内容はかなり充実したもので、表現すべき複雑な状況が多い。そのためであろうか、筋の運びの中では、焦点構文を用いることにより、指示対象の重要性を予告しようとする手法が効果的に用いられている。この手法によって聞き手は、これからの内容で何に注意を向けるべきかをあらかじめ知らされる。節連鎖の使用は比較的抑えられているが、必要な箇所では効果をあげており、物語を適切に進めるのに役立っている。

## 2.2 おばあさんの話

2つ目の民話テキストはヨヘリソンの民族誌の第9章（Folklore, Kolyma Dialect）の3番目に収められたものである（Jochelson 1926: 248-251）。コリマ・ユカギール語原文の長さは252単語である。ピリオドに基づいて数えた文の数は58、そのうち28文（文全体の48.3%）を節連鎖が占める。収録日・収録地は付されていないが、顕著な方言的差異が見当たらないので、他のテキストと同様に1901-02年、現地調査を行っていたヤサーチナ川沿い（あるいは近辺の支流沿い）で収録されたものと思われる。

物語の筋の概要は次の通りである。—主人公のおばあさんが縫い物をしていると、縫い糸がもつれて裁縫台にからまり、裁縫台は動き出して、彼女を湖まで連れて行く。彼女は湖から2尾のカワカマスを釣り上げ、岸辺では2つの白鳥の卵を見つける。帰り道で見つけた4つの石と一緒にこれらを自宅に持ち帰り、家中に配置したところに老人の妖精がやってくる。妖精は彼女の仕掛けた計略にはまり、身動きが取れなくなる。彼女は妖精を殺す。妖精の死骸を外に運び出すと、彼女は柳のテントを建てる。すると翌朝、それは立派な家になり、美しい若者が中にいた。彼女も若返っていた。二人は結婚して幸せに暮らした。—このように行動力も知恵もある年配の女性が次々に難題を解決していくという趣向で語られる、生き生きとした冒険譚

である。前節で扱った民話と比べると、アクションが連続する場面が非常に多いのが特徴であり、それは民話の文体とも相関している。

物語の出だしは単文で、ごく短い。2番目の文からさっそく事態が動き出す。すぐに節連鎖と焦点構造（下線部）が現れることが確認できる：

- (13) irki-n terikie-die le-i, modo-i. modo-t edil-ek  
 1- ↑ おばあさん -DIM いる -I3SG 住む -I3SG 住む -CONV 臛糸 -FOC  
yodut-a-mele.  
 もつれる -INC-T3SG

「一人のおばあさんが暮らしていた。そうしていると、臛糸がもつれてきた」[YYT248]  
 この臛糸（縫い物のための動物の臛で作られた糸）がもつれたことが、以後のおばあさんの冒険のきっかけとなる。以下、この小さなトラブルは、裁縫台（縫い物を中心に家事一般に使う台）や指ぬき（裁縫用の道具）など、家事を象徴する道具群に伝播していくが、これらの物は付随的なため、焦点が置かれない。やがて裁縫台は自ら動き出し、湖まで飛んでいく。

- (14) tude ninbe-gale ta: poni-m. poni-delle pog-ie-i.  
 3POSS 裁縫台 -ACC そこで 置く -T3SG 置く -CONV 飛ぶ -INC-I3SG  
 irki-n yalxil-ge egedeč.  
 1- ↑ 湖 -LOC 着く /I3SG

「彼女は裁縫台に乗った。乗って飛び上がった。ある湖に着いた」[YYT248]  
 小さなアクションが連続する場面と言ってよいが、このような場面で好まれる文体が節連鎖である。それも、前の文の末尾の定動詞を繰り返し、次の文でそれを副動詞として使うという形だ（例文（14）の下線部）。小気味よいテンポ感がこうして生まれ、次の行動へとリズムカルに移行する。この民話で多用される文体である。

湖に着いたおばあさんは、てきぱきと行動を起こしていく。そして後々重要な役割を果たすことになるアイテムを手に入れていく。上記で指摘した形の節連鎖、および焦点構造が集中的に現れるこの箇所を見よう：

- (15) xon-delle yalxil ord'e-ge prolube-lek a-mele. prolube  
 行く -CONV 湖 中心 -LOC 氷の穴 -FOC 作る -T3SG/OF 氷の穴  
 a-delle egede-i. egede-ge ataxu-n cukodie-k eure-l.  
 作る -CONV 覗く -I3SG 覗く -LOC 2- ↑ カワカマス -FOC 泳ぐ -SF

「（おばあさんは）行って、湖の真ん中に氷の穴を開けた。氷の穴を開けると、覗き込んだ。覗き込むと、2尾のカワカマスが泳いでいた」[YYT248]

快いリズムを作り出す節連鎖の多用とともに、彼女がカワカマスを見つけたことが語られる。これに焦点が置かれていることから、カワカマスが後の筋で重要な役割を果たすことが予想されるが、この予想は的中する。彼女の釣り上げたカワカマスはやがて鍋の中から飛び出し、妖



精の顔に食らいつくことになるのだ。

こうして彼女は2つの白鳥の卵を手に入れ、さらに帰途では4つの石を手に入れることになる。これらが焦点構文で表現されていることを指摘するに留め、老人の妖精が来襲してきた場面に急いで注意を向けることにしよう。前節で検討した民話と同じく、妖精の立てた「物音」に焦点が置かれる。悪い予感とともに、サスペンスが生じる瞬間である：

(16) modo-de-ge pude čixire-lek medu-l cacpe logogoč.

いる -POSS-LOC 外で 雪のきしみ -FOC 聞こえる -SF 扉 開く /I3SG

「(おばあさんが) そうしていると、外で雪のきしむ音がした。扉が開いた」[YYT249]

こうして入って来たのは老人の妖精である。だが実際のところ、この妖精はどこか間が抜けているようで、動作もぎこちない。やがて、おばあさんの仕掛けておいた罠にこの妖精は次々とハマり、ひどい目にあわされる。妖精が暖炉に火を起こそうとして灰を掻き回すと、灰の中に埋めておいた白鳥の卵が破裂して、自らの目を直撃する。このアクションの連続もまた、節連鎖で効果的に表現されている：

(17) tinetan yomičomo yaiče-pul ataxlu lute-ŋit aŋd'e-de-ule

この 白鳥 卵 -PL 両方 破裂する -CONV 目 -POSS-ACC

ataxlu iruguc-ŋam.

両方 貫く -T3PL

「この白鳥の卵は2つとも破裂して、(妖精の) 目を両方とも貫いた」[YYT249]

この混乱に乗じて、彼女は老人の妖精に襲いかかり、首尾良く妖精を殺して外に運び出す。柳で新たに建てた小屋の中で眠ると、不思議なことに翌朝、小屋は立派な家になり、彼女も若返っている。なお、当時の民話では頻度の低い伝聞法 (evidential mood) がこの部分に限って現れていることは興味深い：

(18) omoče numo-ŋol numo-gi kude-lel. tudel omoče marxil-ŋol

良い 家 -ESS 家 -POSS なる -EVID/I3SG 3SG 良い 娘 -ESS

kude-lel.

なる -EVID/I3SG

「その家は良い家になったそうだ。彼女は美しい娘になったそうだ」[YYT250]

そして彼女は柳の家の中に、美しい若者 (焦点が置かれる) を見出す。若者は髪を梳かしつつ、柳の家の中に座っている。物語の終わりでは、節連鎖を伴って簡潔にハッピーエンドが表現される：

(19) tinetan adil kieč. n'e=min-ŋi. n'e=min-delle

この 若者 来る /I3SG RECIP=取る -I3PL RECIP=取る -CONV

mad-a-ŋi.

住む -INC-I3PL

「この若者は（彼女のところに）来た。彼らは結婚した。結婚して暮らし始めた」  
[YYT250]

この民話では、連続するアクションによって表現される活発な雰囲気が全体を支配している。文体的特徴から見ると、前節で検討した民話に比べて、こちらは節連鎖の割合がかなり多い（前節の民話 27.8% に対し、本節の民話は 48.3%）。この顕著な違いはおそらく、民話自体の内容や雰囲気の違いと相関している。なお、場面が次々と移りゆくことから、当然ながら新たに登場する指示対象の数も多いはずだ。しかし、焦点構造が現れる回数は 8 つしかない。つまり、焦点構造は新しい指示対象に対して機械的に適用されるのではなく、必要な場合に限って使われているのである。

### 3. 文体論的パラメータ

20 世紀初頭の 2 篇のコリマ・ユカギール民話を、2 つの文体論的特徴—節連鎖と焦点構造—に注目しつつ分析してきた。本節ではその結果をまとめつつ、これらの構造が民話の中に現れる際に考慮される文体論的パラメータを指摘することを試みる。

#### 3.1 節連鎖に関して

一般的には、20 世紀初頭のコリマ・ユカギール民話において、節連鎖は積極的に活用されていると言える。ただし以下の 2 点に留意すべきである。

第 1 に、特に民話の冒頭において、家族構成などの状況設定を説明する下りでは、節連鎖は避けられる傾向が強い。たとえば今回の 1 番目の民話の冒頭はこうなっている：

(20) irki-n polut le-i terike-n-i. ataxu-d uo-le uo-ne-i.  
1- ↑ 老人 ある -I3SG 妻-持つ -I3SG 2- ↑ 子 -INSTR 子-持つ -I3SG

「1 人の老人がいた。妻がいた。2 人の子どもがいた」[YYT241]

今回の 2 番目の民話の状況説明はごく短いものであるが（上記の例文 (13) の前半）、この箇所もまた単文の連なりである。つまり、登場人物が行動を起こすまでの間、節連鎖の使用は控えられると言ってよい。

第 2 に、主要な登場人物同士が物語の中で対話するとき、それが言い争いなど、対立的な雰囲気ののであれば、節連鎖が用いられない傾向が強い。今回の場合は、1 番目の民話における兄と妹の間の険悪な会話（上記の例文 (7)）がこれにあたる。もちろん会話である以上、内容の連続性は何かあるはずで、そこに注目すれば節連鎖を使用することも不可能ではないだろう<sup>9)</sup>。だが例文 (7) に見られるように、敢えて発言主体を主語として明示し、それぞれの発話内容を個別に引用する方が、互いの距離感を際立たせるには効果的である。これもまた、文体

9) 現代のコリマ・ユカギール語では、後述する引用節・引用構文を用いることで、節連鎖による対話の表現が可能となっており、ある程度の使用例も見られる。

上の一つの工夫だと言える。

以上2点を除けば、20世紀初頭のコリマ・ユカギール民話における節連続の使用には特に制限はないように思われる。したがってここから先は、その民話のジャンルに応じて、あるいは語り手の好みに応じて、節連続の使用に文体論的な変異が生じうる領域となる。その際に考慮される文体論的パラメータは以下の2点であると思われる。第1点は、事態の関連性への考慮である。これは話者（民話の語り手）が複数の事態の間に何らかの関連性があると見なす度合いであり、関連性が高いと見なすほど、節連鎖が現れやすい。これが最も顕著に見られるのは、固定された場面で次々にアクションが展開していくような場合である。たとえば今回の第1の民話で、月の顔の妖精の来襲直後、追い詰められた妹が行動を起こす場面（上記の例文(9)のすぐ後）には積極的に節連鎖が用いられる：

(21) pai cog-i. cou-delle ai yaxt-a-i. yaxte-t monn-i (...)

女 入る -I3SG 入る -CONV また 歌う -INC-I3SG 歌う -CONV 言う -I3SG

「女（妹）は家に入った。入って歌い始めた。歌いながら言った」[YYT242]

もっとも第1の民話が語る筋は長期間にわたるできごとなので、こうした節連鎖の出現はそれほど多くない。これに対して第2の民話はごく短い間に連続する出来事を語っているため、民話のほぼ全体にわたって節連鎖が出現している。すでに指摘したとおり、今回扱った2つの民話の間では節連鎖の出現頻度が著しく異なる。この第1の文体論的パラメータを仮定することによって、この違いを説明することができるだろう。

第2点は、行為の背景への考慮である。これは話者（民話の語り手）がある行為を表現する場合、その背景をどの程度の詳しさを描写するかの度合いであり、背景の描写を詳しく求めるほど、節連鎖が現れやすい。この場合、最もよく使われる手段は副動詞 -t「～しつつ、～しながら」である<sup>10)</sup>。たとえば今回の第2の民話で、おばあさんが白鳥の卵を見つける場面では：

(22) xartad'-u-t ataxu-n yomičomo-yaiče-k num-mele.

雪降る -△ -CONV 2つ -↑ 白鳥 -卵 -FOC 見つける -T3SG/OF

「雪が降る中で、（彼女は）2つの白鳥の卵を見つけた」[YYT249]

最初の副動詞（従属節）によって、この場面の背景が描写されている。また興味深いことに、今回の2つの民話の結末に共通して登場する「美しい若者」は、発見された時には「髪を梳かしながら」柳の小屋の中に座っている。この印象深い身振りは、どちらの民話においても必須の背景描写となる。第2の民話の結末近くから引用しよう：

(23) [...] onmie-die-numo moľko-do-go omoče-d adil-ek yo:

柳 -DIM-家 中 -POSS-LOC 良い -↑ 若者 -FOC 頭

10) 現代のコリマ・ユカギールの背景説明で、これに次いで多く使われるのは、異主語を導く動名詞の所格形（-dege など）を用いた従属節である。この種類の従属節では時間的な先行/同時の区別が中和されている。20世紀初頭のコリマ・ユカギール語におけるこの種類の従属節の詳しい用法については後日の課題としたい。

anski-t            modo-l  
 梳かす -CONV    いる -SF

「(...) 柳の家の中に、美しい若者が髪を梳かしながら座っていた」[YYT250]

焦点構造の途中に従属節 (yo: ansit) を挿入するという、やや珍しい方法をとってまで背景の描写が行われている。民話の語り手のこだわりが感じられる場面である。

### 3.2 焦点構造に関して

まず事実を指摘しておくならば、前節の分析の途中でも指摘してきたように、必ずしも全ての初出の指示対象（すなわち新しい情報）に対して焦点構造が使われるわけではない。言い換えれば、初出でありながら焦点で標示されない要素も存在する。つまり民話テキストでは、情報構造に基づく言語学的な説明と、焦点構造の実際の現れの間には若干のずれがある。これを説明するためには、物語の筋の上で重要な役割を果たす要素の出現、という文体論的パラメータを考える必要がある。その結果、このような要素が出現する時には焦点構造が現れやすいということになる。もちろん、どの要素を重要な役割と考えるかは話者（民話の語り手）の選択に委ねられており、この点に文体的な多様性が生じうる。

具体的に考えてみるならば、今回分析した第1の民話において、焦点構造で標示された要素は出現順に、妹、（妖精来襲の）物音、（野ウサギの）踊り、（野ウサギの）歌の4つである。数は多くないが、これらは民話の筋の上でいずれも重要な役割を果たす要素である。また第2の民話において、焦点構造で標示された要素を出現順に示すと、腱糸、氷の穴、2尾のカワカマス、2つの白鳥の卵、4つの石、（妖精来襲の）雪のきしみ、（妖精が起こす）火、（妖精の飲む）水、美しい若者の8つである。これらはとりもなおさず、この民話の筋全体を要約するような要素であろう。

焦点構造の出現の多寡は、物語の語り口とも相関している。この第2の民話において倍近い焦点構造が現れているのは、物語の筋全体がアクション中心に構成されており、新しい場面（したがって新しい要素）が次々に現れるからであろう。これに対して第1の民話は、若干の沈鬱さを感じさせる語り口を持ち、落ち着いた雰囲気ですくすくと物語を進めていく。これが焦点構造の出現を抑えていると考えられる。

## 4. 結びに代えて

筆者はここまでの議論において、20世紀初頭のコリマ・ユカギール民話を文体論的な観点から分析してきた。特に節連鎖と焦点構造という2つの文体論的特徴に注目することにより、そこに働いている文体論的パラメータを指摘した。その結果、節連鎖については、「事態の関連性への考慮」、および「行為の背景への考慮」という2つの文体論的パラメータが指摘できた。また焦点構造については、「物語の筋の上で重要な役割を果たす要素の出現」というパラメー

タが指摘できた。個々の民話の語り手は、語る民話のジャンルや筋の運びを考えつつ、そこに語り手の好みも加味しながら語りを進めていく。その際に選び取られる文体を決める基準となるパラメータの中にこれらも含まれていると考えられる。

最後にこの結果を、前著で扱った現代のコリマ・ユカギール民話の文体論的特徴と対照することを試みる。ただし資料はまだ限られているので、以下の指摘はあくまで暫定的な結果にすぎないことを断っておきたい。

節連鎖に話題を絞るならば、現代のコリマ・ユカギール民話の文体にも今回と同様のパラメータは働いていると考えられる。今回の第1の民話の落ち着いた語り口は、前著での V. G. Šalugin 氏の民話を思わせる。一方、今回の第2の民話の躍動的な語り口は、前著での A. V. Sleptsova 氏の民話に近い。語られている民話の内容はもちろん異なるが、それぞれの文体には無視できない共通性が見て取れる。同時に、20世紀初頭に語られた民話と同じくらいの文体論的な多様性が現代にも認められるという点で、コリマ・ユカギール人の民話を語る力は、その話者数の著しい減少にもかかわらず、決して衰えていないと言えるだろう。

筆者にはまた、文体論的洗練に向かう流れさえも感じられる。一例をあげるならば、今回の第1の民話と Šalugin 氏の民話を比べた場合、明らかに後者（つまり現代の民話）の方が節連鎖の割合が多い（前者 27.8% に対して後者は 53.8%）。この原因はおそらく2つある。まず第1の原因は、Šalugin 氏の語りにおいては、行為の背景の詳しい描写を追求する傾向が非常に強いことである。節連鎖という手段を最大限に駆使することで、文体論的パラメータの強度を高めていると言えよう。また第2の原因は、副動詞 monut「～と言って」を末尾に置く引用節を駆使することによって、登場人物の発言を複文中に繰り返すことが多いためである。この形の引用構文は20世紀初頭のコリマ・ユカギール民話ではごく稀にしか見られず、その後の発達である可能性が高い（遠藤 2017）。ここに出現した語りの重層化は、この1世紀ほどの間にコリマ・ユカギール民話が獲得した新たな文体なのかもしれない。

#### 【例文のグロスに使用した省略記号一覧】

ABL (ablative), ACC (accusative), ALL (allative), CONV (converb), DIM (diminutive), EVID (evidential mood), ESS (essive), FOC (focus), FUT (future), I (intransitive), INC (inchoative), INSTR (instrumental), LOC (locative), OF (object focus), PL (plural), POSS (possessive), RECIP (reciprocal), SF (subject focus), SG (singular), T (transitive), 1 (first person), 2 (second person), 3 (third person)

#### 【参考文献】

- 遠藤 史 (2006) 「コリマ・ユカギール民話文体論の試み」『経済理論』第 331 号, pp.1-18.  
 ----- (2017) 「コリマ・ユカギール語の引用構文とその発達」『北方人文研究』第 10 号, pp.129-143.

Forsyth, James (1992) *A History of the Peoples of Siberia: Russia's North Asian Colony 1581-1990*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jochelson, Waldemar (1905) Essay on the Grammar of the Yukaghir Language. *American Anthropologist, New Series*, Vol.7, No.2, pp.369-424.

----- (1926) *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*. Leiden: E. J. Brill.

Nikolaeva, Irina (1997) *Yukagir Texts*. Specimina Sibirica XIII. Szombathely: Savariae.